

神奈川県出土の土製品

近世プロジェクトチーム

1. はじめに

昨年の県内近世遺跡の再集成に基づき、本年は遺跡出土の土製品を取り上げることとした。ここで取り扱う土製品とは、土鍋や焙烙、火鉢といった日常生活用品を除いた、人形・ままごと道具・箱庭道具、そしていわゆる泥面子と称される遊・玩具の類である。これら遊・玩具は、土製のほか、木製・紙製・布製・陶磁製・貝製・石製・骨角製・ガラス製・金属製などさまざまな材質で作られているが、出土資料としては、腐食しにくく、かつ大量に作られたという点で土製品が他を圧倒しているといえよう。土製をはじめとする遊・玩具は江戸はもとより、名古屋・京都・大阪などの近世都市の諸遺跡で多量の出土をみており、種別ごとの編年にとどまらず、生産地や製作技法の検討、さらには出土遺跡・遺構の性格の追究といった試みがなされているところである。一方、近世諸都市の周辺地域については、その出土量も少なく、一部の論考を除いて、あまり注目を受けない存在であったといえよう。

このような状況にあって、神奈川県下出土の近世土製品を集成するのも一考と考え、今回のテーマとすることとした。土製品は表面採集や表土中からの出土が多く、近世以外の時代の遺跡の報告書に報告されている可能性も多く、県下で刊行されている膨大な報告書から一点も漏らさず集成するというのは、きわめて困難な状況であることから、とりあえず、近世遺跡の集成を行った『かながわの考古学』第5集および同書「研究紀要7」の出土遺物欄にある土製品を当てることとしたが、報告書に実測図がなく、写真や記述のみにとどまっていたり、実測図があっても小破片のため、全形がわからないものなど相当数存在することが判明した。このため、集成することは困難と判断し、ここでは県下出土の土製品の主だったものを取り上げて概観することとした。

なお、県内の遺跡報告書の引用文献については、『かながわの考古学』第5集および同書「研究紀要7」の文献欄を参照願いたい。

2. 研究史

考古学資料として早くから着目されたのは土製品の中でも、いわゆる泥面子と称されるものである。古くは1928年、首藤岩泉氏による円盤状の泥面子に描かれたモチーフを研究対象としたものがあるが（首藤1928）、本格的な研究は、1970年代前半になってからのことである。金刺伸吾氏は千葉県西部の市川市・船橋市などの一帯に広がる下総台地の畑地で泥面子が多数表面採集されることに着目され、五穀豊穡を願って農民が畑地に播いたという播畑説を紹介するとともに、江戸市中で大量に排泄された下肥が船で運搬され、下総台地に金肥として大量に運び込まれたという歴史的事実から、江戸市中で下肥の中にいわゆる泥面子が混入したとする下肥混入説を唱えられた（金刺1973・市立市川歴史博物館1983）。この説は、江戸のリサイクルといった問題を考古学的に知りうる具体的な事象として興味深い論考と考えるが、一部否定的な見解も示されている。

1970年代、各地において大規模な発掘調査が行われるようになり、いわゆる泥面子の出土例も増え、増子

陽子氏は千葉県内の遺跡から出土した泥面子について集成し、文様や形状に着目して分類を行なっている(増子1978)。

1980年代から東京都内の近世遺跡の調査が盛んに行われるようになり、泥面子をはじめとする土製品の出土例が増加するが、きわめて注目される論考は神奈川県内の遺跡の報告書であった(富永・大村1985)。茅ヶ崎市の新湘南国道建設に伴う7地点の遺跡から出土したいわゆる泥面子について、早崎 薫・宮滝交二の両氏が考察されたもので、泥面子の定義として、「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2~3.5cm大の素焼きの土製品の総称」とし、それら泥面子の出土層位に着目され、現在のところ宝永スコリア層より下位層からの出土はまったくなかったという点を強調されている。また泥面子を2類に大別され、Ⅰ類は人物、神仏、動物、調度などを型抜きしたもの、Ⅱ類は円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもので、前者が40点中38点、後者は2点のみであった。Ⅰ類はさらに細分され、1は人物、神仏などの顔面を型抜きしたもので、大型(長さ3.5cmくらい a類)と小型(2~2.5cmくらい b類)に細分、2は人物、神仏などの全体像を、3は動物、4は調度などの形態をそれぞれ型抜きしたものとし、個々に詳細な観察を加えられている。さらに両氏は、泥面子の名称や使用目的について文献史料を用いて綿密な考察を加えられ、Ⅰ類は文献にみられる「面摸^{めんもく}」という名称、Ⅱ類は「面打^{めんちよう}」に該当するとされ、ここに、初めて考古学的に分類された泥面子が、それぞれに文献に基づいた名称を付与されることとなった。また江戸では「面打」が、下総や相模など江戸近郊では「面摸」が優勢であるという地域的分布の違いを指摘され、これをどのように解釈するのか、そして生産地より消費地・消費者への流通過程を解明することの2点を今後の研究課題とされている。

一方、東京都内では発掘資料の急増に伴い、80年代後半から90年代にかけて、いくつかの論考が公にされている。新宿区三栄町遺跡でも(東京都新宿区1988)、加納 梓氏がいわゆる泥面子について、円盤状を呈するものと人面、動物面、道具等を型抜きしたものの2群に分類し、前者を「面打」、後者は「面摸」のほか「芥子面^{けしめん}」に相当するとされ、直径値による出現頻度をグラフ化し、前者は直径2.0cm以下、2.5cm前後、3.0cm以上のものの3類に、後者は2.6~3.9cmと1.9~2.3cmのものの2類に分けているのが注目される。また扇浦正義氏は同遺跡出土の一連の近世遺物の変遷において、遊・玩具を中心とした土製品についての変遷を提示され、「面打」については、18世紀代に中型が出現し、19世紀代に入ると小型・大型とバリエーションが広がるとされた。このように、土製品についても編年が示されたという点で評価しうるものの、「芥子面」の出現を19世紀前葉に求めている点、文献史料とは多少齟齬がみられるようである。

このように、これまで泥面子として報告されていた土製品は、ここにきて「面打」、「面摸」、「芥子面」という個別の名称が付されるようになったことに対し、石神裕之氏は「泥面子」は「器種」を表す用語として考える必要がある」とし、上記の3種に大別ができるとした(石神1996・1997)。すなわち、「円盤状を呈するものは「面打」、人物などの「顔」をかたどるのは「芥子面」、そして泥などを詰めて抜く遊びといわれるものは「面摸」とする」とされた。そして、「面打」の直径値による出現頻度を検討し、三栄町遺跡の3分類に蓋然性があるとし、21~23mmが標準とされた。また関西地域の分析も試みられ、京・大阪では27~29mmの大型品に集中することが明らかにされた。さらに「面打」のモチーフによる分類、武家地と町人地での出土内容の比較などがなされている。特に、旗本・御家人拝領地であった遺跡からは「面打」の出土量が多く、「芥子面」は町人地からの出土例がなく、関西系の遊びとして、その地域に関係した住民が多く居住していた紀尾井町遺跡・三栄町遺跡などから出土していることなど注目すべき分析がなされている。

このほか、安芸毬子氏は東京大学構内遺跡を中心に、土人形をはじめとする土製品の製作技法や出土遺跡

の性格の検討、さらには共伴陶磁器の年代から土製品の編年も試みられており（安芸1991・2000ほか）、近年はもっぱら、江戸の遺跡中心に土製品の研究が進展しているといったところが現状である。

3. 泥面子について

以上の研究史を概観し、問題になるのは、いわゆる泥面子と称されるものが、報告者によってまちまちに解釈されていることである。泥面子の定義としては、新湘南国道で規定されたように「型抜きによる様々な文様・意匠を持つ2～3.5cm大の素焼きの土製品の総称」としてとらえてよいと考えるが、第1図に示したように、いわゆる泥面子やその他の土製品の個別名称には統一が取れていないのが現状である。

そもそも泥面子という表現が一般的に用いられるようになった背景としては、早崎・宮滝両氏が指摘しているように、近代以降に出現する「鉛面子」、「紙面子」に対する相対的な名称であって、泥面子という呼称は近代以降に求められるのではないかとされている。となると、泥面子という呼称は破棄し、江戸時代の呼称が文献史料などから判るのであれば、それを用いた方がよいといえよう。早崎・宮滝両氏にも取り上げられている『嬉遊笑覧』（喜多村信節 文政13（1830）年）をもう一度見てみることにしたい。同書の巻六下、児童の部「めんかた」の項には、

「今小兒玩物のめんかたは面摸なり瓦の摸に土を入れてぬくなり、また芥子面とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面ありしが、今はかはりて銭のように紋形いろいろ付たる面打となれり」（下線筆者）

とあり（喜多村1979）、1830年当時、小児の玩具として「面摸」と「面打」があり、「面打」以前には「芥子面」もあったことがうかがえる。これらは、従来いわゆる泥面子と称される範疇に属するものといってよいと考えられ、「銭のように紋形いろいろ付たる面打」が出土資料にある「円盤状を呈し、上底面に文様などを型抜きしたもの」に相当することはまず異論のないところで、これについては第1図においても汐留遺跡を除いて一致をみているところである。問題になるのは、「面摸」で、これについては、『守貞漫稿』（喜田川守貞 嘉永6（1853）年）引用の享保12（1727）年の目附絵に

「めんがた 大阪下り」

とあり（喜田川1996）、18世紀前半に存在していたことが知れる。さらに『守貞漫稿』において「面形壳 今ハ壳巡ラズ 番太郎ノ店等ニテ売之土形也 小兒此形ニ土ヲ納レアクレハ面トナルモノ也 今制ハ甚タ小也」（下線筆者）

とあり、『嬉遊笑覧』にみられる「面摸」と『守貞漫稿』の「面形」はカタの字が異なるものの、下線部に記されているように、いずれも型を取るための土形、すなわち雌型のことであって、土を入れて抜いてでき

茅ヶ崎市新湘南国道1985	面打	面摸	-	-	碁石	-
新宿区三栄町遺跡1988	面打	面摸・芥子面	土製雌型	土製面	碁石	土玉
新宿区内藤町遺跡1992	面打	芥子面	土製型	-	弾碁玉	土玉
文京区諏訪町遺跡1996	面打	芥子面	面摸	-	碁石	-
港区汐留遺跡2000	泥面子	芥子面子	型	面	碁石	-
研究紀要8 かながわの考古学	面打	芥子面	面摸	小面	碁石状土製品	土玉

第1図 泥面子およびその他土製品の呼称例

た完成品、すなわち雄型ではないようである。にもかかわらず、早崎・宮滝両氏は『『嬉遊笑覧』の述べるごとく、このような「めんがた」を用いて製作した土製の面もまた「面摸」と称されるようになっていったようである」としているが、同書の記述から、このように読み取することは一切できない。

新宿区三栄町遺跡をはじめ、近年、都内の遺跡では型抜き用の型の出土が報じられており、それを「土製雌型」とか「土製型」、「型」としているが、これがまさに「面摸」であるといえよう。それでは早崎・宮滝両氏が「面摸」に相当するとしたⅠ類、すなわち人物、神仏、動物、調度などを型抜きし、さらに焼成したものについては、どのように呼称すればよいであろうか。再度、『嬉遊笑覧』をみると、「「芥子面」とて唾にて指のはらに付る小き瓦の面」という記載が目ざれよう。両氏は、現存する「芥子面」はいずれも極彩色であること、裏面に指が入るようくぼんでいることをあげられ、出土資料に該当品はないとして、それ以上言及していないが、Ⅰ-1-bと分類した小型の人物面はまさに「芥子面」と称してよいものと考えられる。というのも、近年の都内の報告例をみると白色とか赤色の彩色残存といった記載が多くあり、彩色が施されていたこと、裏面のくぼみは京都など関西の製品では顕著であるが、江戸で生産されたとみられる製品はくぼみがあるかないか不明瞭なものが主体であることなどが明らかになっているからである。それでは、Ⅰ-1-aとした長さ3.5cmほどの大型の面やⅠ-2～4の人面でないモチーフのものについてはどのように呼称したらよいのであろうか。「芥子面」の芥子は、「芥子粒のような」といった表現に使われるように、ごく小さなものといった意味合いがあるものと思われ、長さ3.5cmともなると唾だけで指に貼りつくかどうか疑わしく、「芥子面」という呼称はふさわしくないように思われるが、製作技法上は「芥子面」となんな変わりはなく、同じ系譜にあることから、ここでは「芥子面」としておきたい。ただし、「芥子面」の用途は指人形から別の用途へと変わっている可能性は否定できないところであろう。

このほか、いわゆる泥面子の範疇には入らないと思われるが、用語が統一されていない土製品についてもここで触れておきたい。一つは径5cm前後の大きさで、両耳付近などに小穴のあいた面である。都内の報告例では、「土製面」とか「面」とされているもので、小児が顔にかぶるには小さすぎるし、どのように使用されたのか、また文献史料からの呼び名も不明であるが、お面であることに変わりはなく、ここでは「小面」としておきたい。さらに「碁石」や「弾碁玉」として報告されている土製品の中には、黒や白に彩色され、明らかに碁石として使用された可能性のあるものも存するが、石製や貝製のいわゆる碁石でないこと、博打やおはじきの前身としての使用も考えられることから「碁石状土製品」としておきたい。またビー玉の前身ともいわれる「土玉」については、用途・名称が明らかでなく、これまでの報告に倣ってその形状からの呼称で通すこととしたい。

4. 県内出土の土製品について

出土状況

神奈川県内における土製品の出土例は横浜市をはじめとする14市1村約60遺跡（地点）を集めることができた。城下町である小田原市での出土事例が多いのは当然のことと思われるが、近世集落が広範囲にわたって調査された逗子市池子遺跡群や清川村宮ヶ瀬遺跡群でも比較的多く出土している。また、藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・伊勢原市等県央地域での出土例も目立つ。出土遺跡は第1表に示したとおりであるが、冒頭にも述べたように、これで県内すべての遺跡を網羅しているわけではない。

第1表 土製品出土遺跡一覧

遺跡名	図No.	遺跡名	図No.
横浜市受地だいやま遺跡	84	小田原市小田原城三の丸	5
横浜市オミネ屋敷	33・43・149	大久保雅楽介邸跡第Ⅵ・Ⅶ地点	
横浜市宿根北遺跡	58	小田原市小田原城三の丸遺跡	
横浜市宿根南遺跡	82	(杉浦平太夫邸跡第Ⅱ地点)	
川崎市宮添遺跡	21・88・131	小田原市小田原城下中宿町遺跡第Ⅱ地点	74・148
逗子市池子遺跡群No1－C地点	45・66・69・86・102	小田原市小田原城下中宿町遺跡第Ⅲ地点	3・37・38・47・55・56・62・70・
逗子市池子遺跡群No1－D地点	16・97		71・79・147
逗子市池子遺跡群No1－E地点	6・10・11・14・15・23・25・26・	小田原市小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅳ地点	31・32・34・50・53・59・72・
	83・99・101・126		78・146
逗子市池子遺跡群No5地点	81・87・134	小田原市小田原城下欄干橋町遺跡第Ⅴ地点	1・42・150～166
逗子市池子遺跡群No7地点（西地区）	8	小田原市感応寺址	48
逗子市池子遺跡群No7地点（東地区）	13・17・22・60・85・113・130	相模原市中村遺跡B地点	18
逗子市池子遺跡群No10地点	44・139	厚木市東町遺跡	12・19・49・52
逗子市池子棧敷戸遺跡	27・29・30	大和市下鶴間甲一号遺跡	46・63・64・76・80・129
鎌倉市円覚寺境内如意庵	土人形	大和市下鶴間長堀遺跡(国道246地域内)	芥子面
藤沢市川名No419遺跡第4・5地点	9	伊勢原市神戸・上宿遺跡（No15）	54・73・140
藤沢市慶應義塾藤沢校地内遺跡	95・96・104・106～108・111・115	伊勢原市坪ノ内・宮ノ前遺跡（No16・17）	135
藤沢市本入こざつ原遺跡	57	伊勢原市坪ノ内・貝ヶ窪遺跡（No18・19・43）	7
藤沢市南葛野遺跡	68	伊勢原市笠窪・谷戸遺跡（No20・42）	65・112・137
藤沢市用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡	39・100・117	伊勢原市不弓引遺跡（No21・22）	119
茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡	90・93・105・127・136・141・143	伊勢原市上粕屋・メ引東遺跡（No40）	28
茅ヶ崎市西久保・広町遺跡	98・103・114・116・125・142	伊勢原市八幡谷戸遺跡	121
茅ヶ崎市宮ノ腰遺跡	91	伊勢原市石田・羽黒遺跡（Ⅳ）	芥子面
茅ヶ崎市新湘南国道関連六図C・D遺跡、	芥子面・面打	伊勢原市咳止橋遺跡	芥子面
四図A遺跡、二図A・B遺跡、上ノ町遺跡		海老名市大谷真鯨遺跡	128
平塚市真田北金目遺跡	40・41	綾瀬市吉岡遺跡群（A区）	94・109・123
平塚市神明久保遺跡	4・67・92・122・124・132・133	清川村宮ヶ瀬遺跡群南（No2）遺跡	167～172
平塚市根坂間小宮阿弥陀畑遺跡	120	清川村宮ヶ瀬遺跡群馬場（No6）遺跡	24・51・61・144・145
平塚市原口遺跡	110・118・138	清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷（No8）遺跡	77・89
平塚市宮ノ脇遺跡	土人形	清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No10）遺跡	20
		清川村宮ヶ瀬遺跡群北原（No9）遺跡	ままごと道具

※図化し得なかった遺跡の資料については図No欄に製品名を記した。

土製品を出土した遺跡の性格は、武家屋敷（大久保雅楽介邸跡・杉浦平太夫邸跡）、町人地（欄干橋町遺跡・中宿町遺跡）、商人屋敷（東町遺跡）、名主屋敷（オミネ屋敷）、村落（池子遺跡群・宮ヶ瀬遺跡群等）と様々であり、土製品が身分を問わず人々の生活の中に広く浸透していたことがうかがえる。

各遺跡からの出土量は、都内の江戸遺跡のように1遺跡から100点以上が出土している例はなく、中宿町遺跡第Ⅲ地点、欄干橋町遺跡第Ⅳ地点、池子遺跡群No1－E地点等で20～30点出土しているのが最多で、多くは10点にも満たない状況である。そのため、今回得ることの出来た資料をすべて集めても、新宿区三栄町遺跡や同区内藤町遺跡等の1遺跡の総出土数に及ばない。

遺構内での出土状況は、溝状遺構・畝状遺構・井戸址・地下室・竪穴状遺構・土坑・ピット群・池跡・土坑墓等の遺構から出土しているものと遺構外出土のものがあり、量的には後者が多く認められる。遺構外資料は、表土や耕作土から出土することが多く、遺構出土資料は、土坑墓に埋納されたものを除くと陶磁器等の生活用具とともに廃棄された状態で出土することが多い。

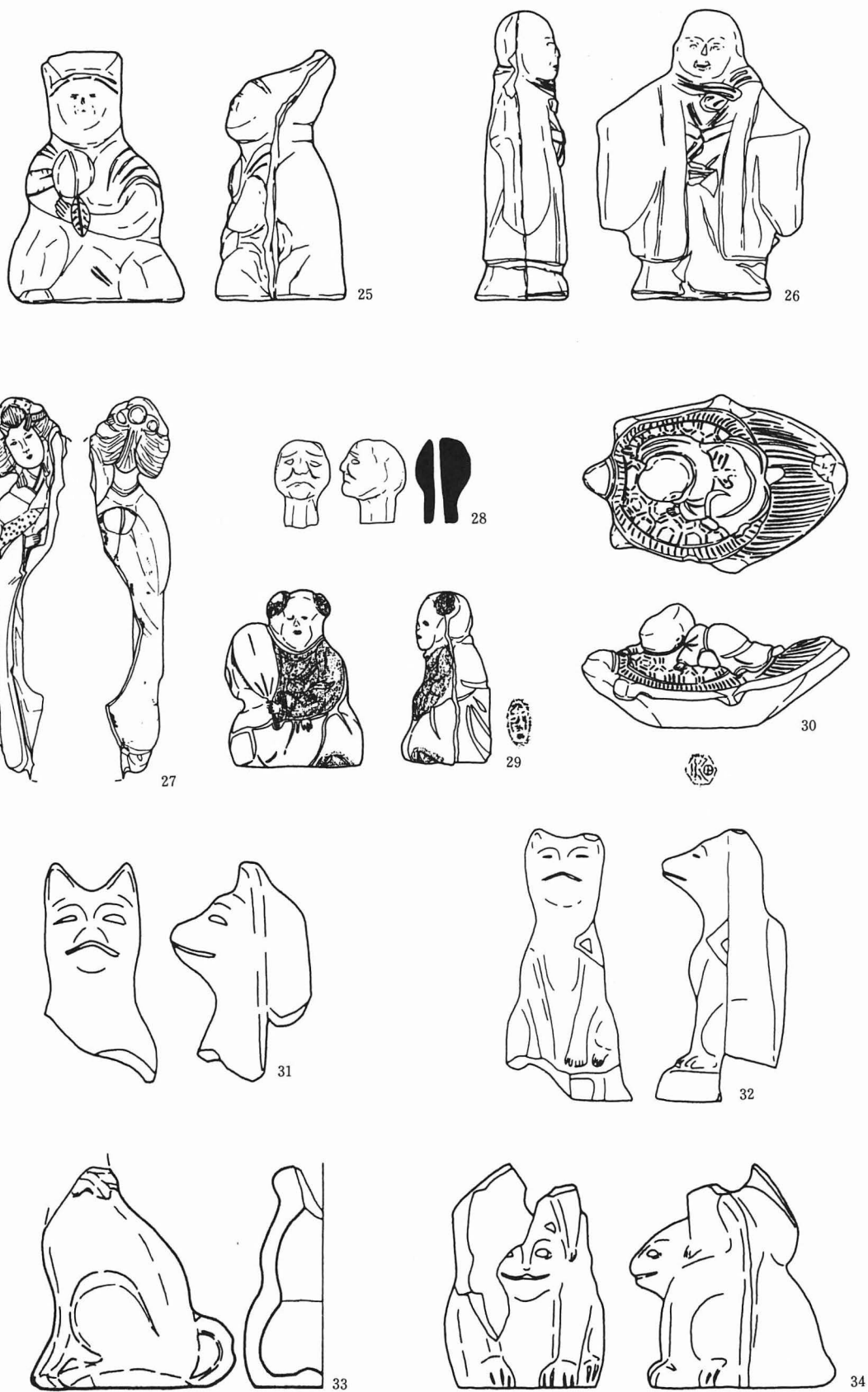
種別ごとの出土状況

今回得られた資料を、①土人形、②ままごと道具、③箱庭道具、④面打・芥子面・面摸、⑤その他に分類し、比較的遺存状態の良好なものを縮尺1/2に統一して第2～7図に示した。

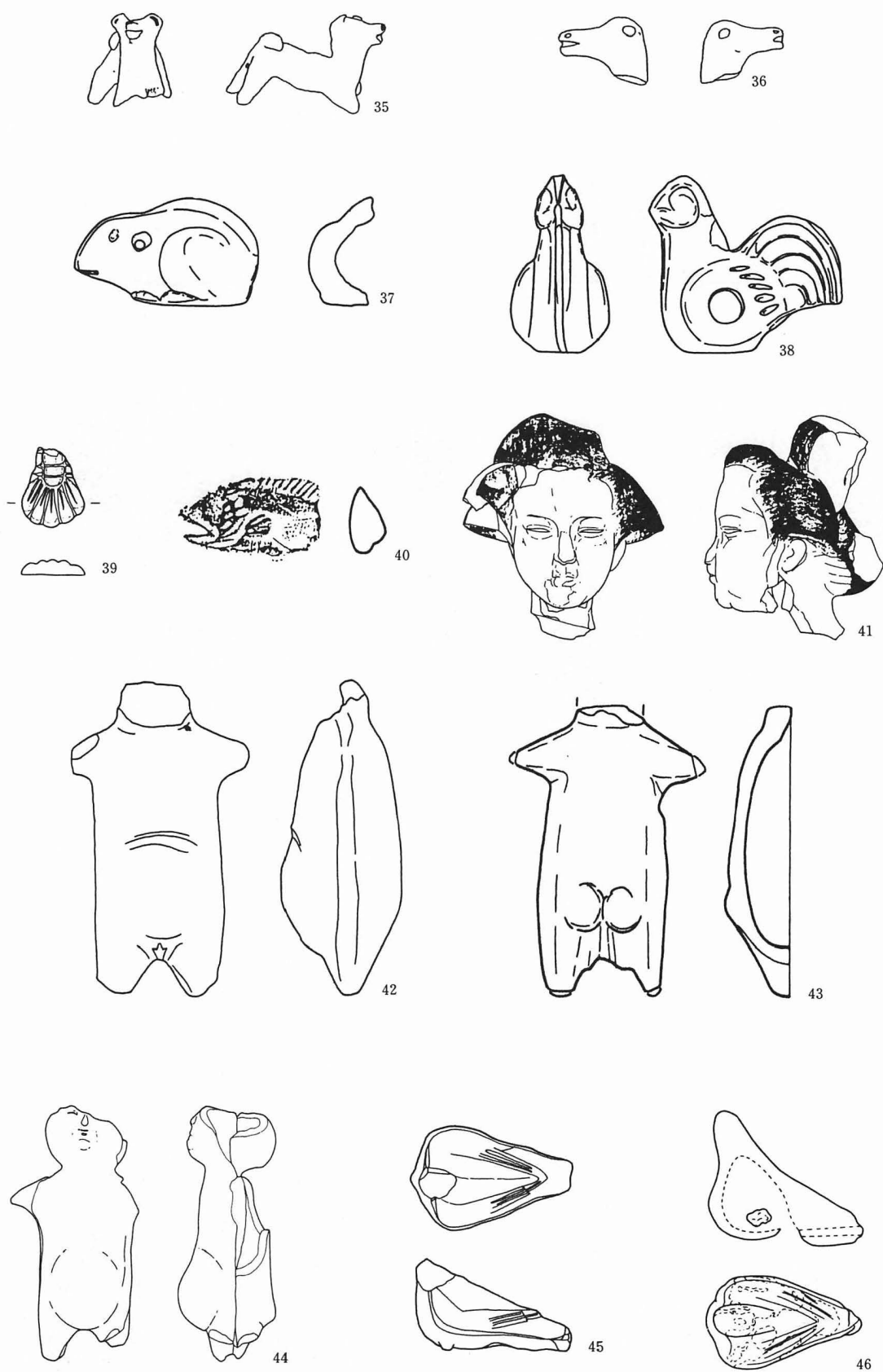
①土人形（1～46）は、出土例の多い資料のひとつで、地域・遺跡の性格に関係なく出土している。1～41は人物や動物等をモチーフとしたもので、5cm以下の小型のものと10cm前後の中型のものが主体を占める。立像・座像が多いが、9・10のようにおむすび型を呈するものや30のように亀に童子が乗ったものも見られる。37・38は中宿町遺跡第Ⅲ地点から出土した資料で、同様のものが三栄町遺跡でも報告されている。28は首から頭部に向かって穴が穿たれている首人形である。県内での出土例は少なく、今回確認できたのは1点のみである。42～44は裸人形もしくは孕み人形と呼ばれているもので、図示した以外にも感応寺址、池



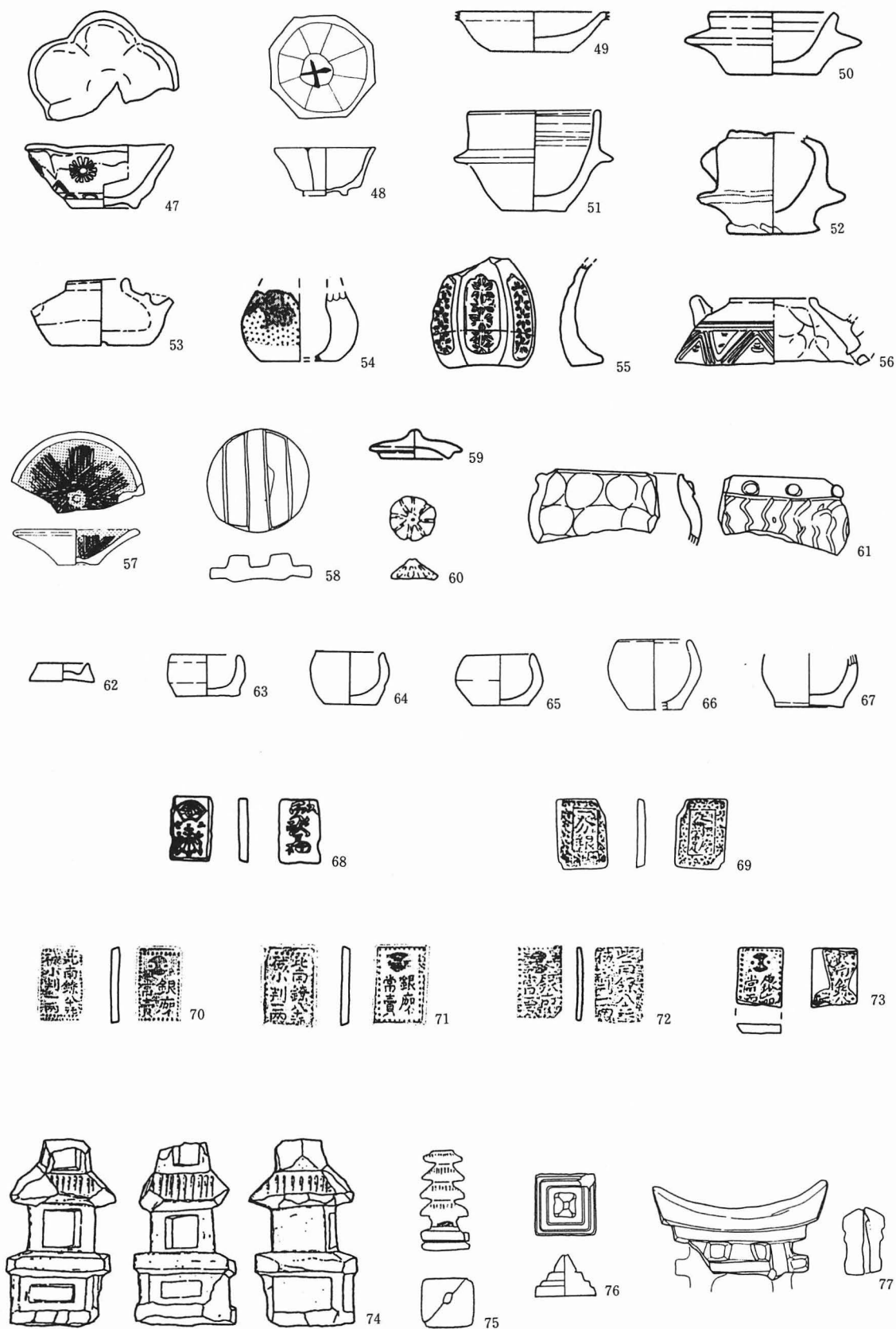
第2図 土人形(1) [S : 1/2]



第3図 土人形(2) [S:1/2]



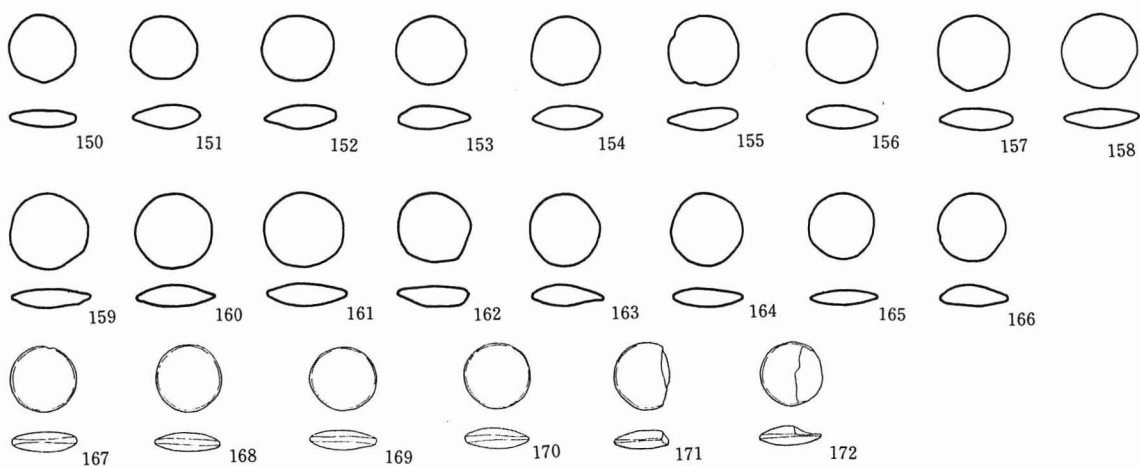
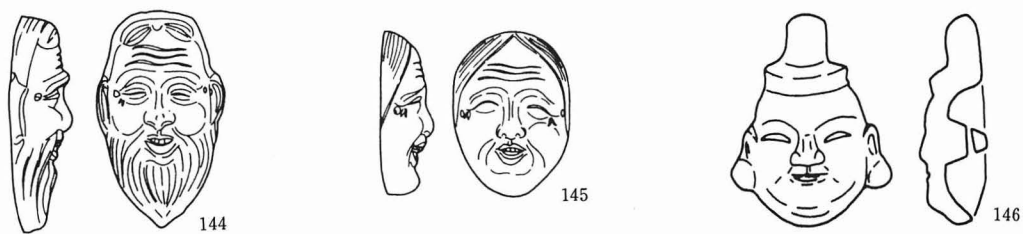
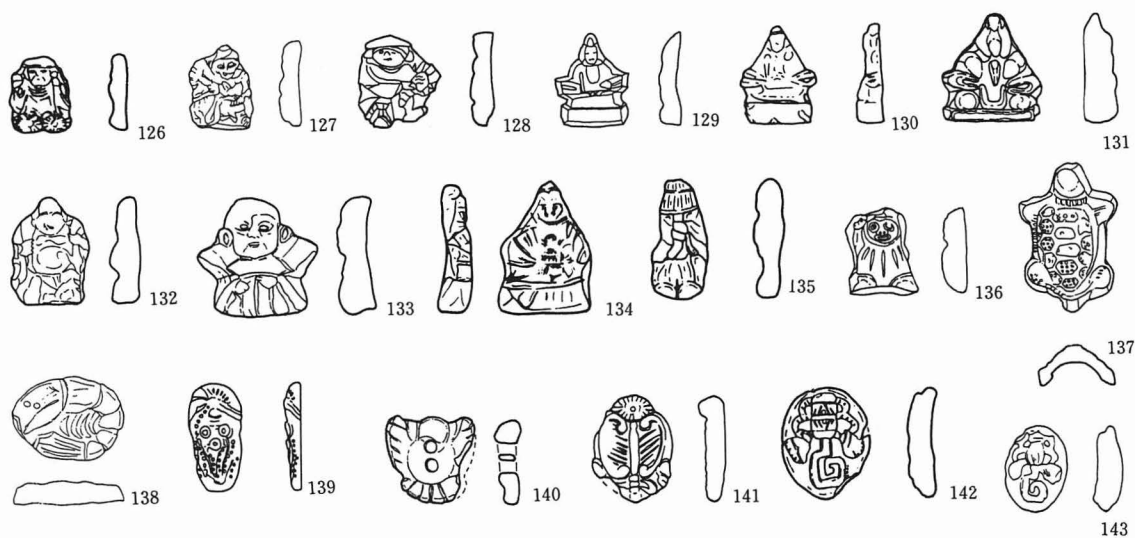
第4図 土人形(3) [S: 1/2]



第5図 ままごとと道具・箱庭道具 [S:1/2]



第6图 面打·芥子面(1) [S:1/2]



第7図 芥子面(2)・小面・土鈴・基石状土製品〔S:1/2〕

子遺跡群No5地点等でも報告されているが、県内での出土例はそれほど多くはない。45・46は鳩笛である。本資料の出土数も少なく、図示した資料以外に大久保雅楽介邸跡で1点出土している程度である。

土人形の中には背面等に刻印が施された資料があることが知られており、都内の遺跡では多数が確認されている。刻印を持つ土製品については、中野高久氏の考察がある（中野1998）。中野氏は都内の遺跡から出土した刻印・篋書きのある土製品を集成し、「刻印・篋書きは江戸在地系製品と京都系製品にのみ認められる。刻印は原型に陽刻されているものと成形後に陰刻されたものがあり、篋書きは成形後に施されている。大半が型作り成形である。江戸在地系製品は幕末、京都系製品は18世紀末頃から見られる」と述べている。刻印が施された資料は、県内では逗子市池子棧敷戸遺跡で2点確認されている（29・30）。それらは、18世紀後半～明治時代の遺物を伴う土坑墓のうちの1基から出土している。1点は施釉された唐子人形で、背面に「弁日」？が陰刻されていると報じられている。この刻印は、嘉永年間の「今戸人形生産者地図」に掲載されている戸沢弁司の「弁司」と思われる。もう1点は無釉の亀抱き童子で、底部に「番」の陽刻があるとされている。こちらは「番」ではなく、京都の欽古堂亀祐（助）の「亀（篆書体）」と推測される。刻印が「弁司」・「亀」だとすると、前者は江戸在地系、後者は京都系の製品で、墓坑の年代は幕末以降の可能性が高い。刻印・篋書きが施された土製品は、製作地・製作者・年代を知ることのできる資料として貴重である。背面・底部等は注意深く観察する必要があるだろう。

②ままごと道具（47～73）は、量的にはそれほど多くないものの各地で出土しており、身分に関係なく利用されていたことがうかがえる。鉢・徳利・釜・土瓶・播鉢等飲食に関連するものが主体を占め、図示したものの他に上ノ町・広町遺跡で七厘が出土している。飲食具以外では宮ヶ瀬遺跡群馬場（No6）遺跡で大鼓の一部（61）が出土している。62～67は素焼きの鉢形を呈する製品である。県内での出土例はそれほど多くなく、都内の遺跡でもあまり出土していないようである。68～73は銀貨を模した模造貨幣である。68・69は一分銀、70～73は南鐐二朱銀を模倣しており、文字は実物と変えられている。

③箱庭道具（74～77）は、都内では比較的多くの遺跡で認められるが、県内での出土事例は少なく、4遺跡で確認できたのみである。モチーフは祠・塔・鳥居がある。

④面打（78～87）も、都内の遺跡での出土例は多いが、県内ではそれほど出土していない。図示した10点以外にも坪ノ内・宮ノ前遺跡、新湘南国道関連遺跡等で出土しているが、15点程度しか確認することができなかった。大きさは直径3.2cm以上を超えるものが3点見られるが、それら以外はいずれも2.2cm前後で、大部分が都内の遺跡における標準的なサイズ（2.1～2.3cm）に収まるものである。モチーフは文字が多いが、力士・火消し纏・植物等も見られる。なお、図示しなかったが、瓦片を面打と同程度の大きさに円盤状に加工したものが、大久保雅楽介邸跡で出土している。

芥子面（88～143）は、土人形と並んで数多く出土している資料である。都内の遺跡では芥子面よりも面打が多く認められるが、県内では逆に芥子面が圧倒的に多く見られる。大きさは径1.4～4.0cmがあるが、2.0cm代が中心で、1.5cm以下や3cmを越すものは少ない。モチーフは人物等の顔を型抜きしたもの（88～125）、全体を型抜きしたもの（126～135）、動物等を型抜きしたものがあり（136～143）、顔を型抜きしたものが主体を占める。芥子面は地域に関係なく認められるが、特に県央地域の茅ヶ崎市・伊勢原市・藤沢市・平塚市等での検出例が目立つ。これらの地域の出土状況を見ると、畑地と推定される場所で表採されたり、耕作土中から出土している例が多い。

面摸は、県内での報告例を確認することはできなかった。都内の遺跡においても面打や芥子面に比べ出土

例は少ない。

小面（144～146）は、径5cm前後で、裏側が窪み、こめかみ等に穴が穿たれた製品で、これまで泥面子の範疇に入れられたり、土製面と分類されているものである。出土事例は少なく、宮ヶ瀬遺跡群馬場（No6）遺跡で2点、欄干橋遺跡第Ⅳ地点で1点確認できたのみである。

⑤その他の資料として、土鈴（147～149）、基石状土製品（150～172）が出土している。土鈴の報告例は少なく、確認できたのは3点のみである。基石状土製品は、白色や黒色に塗られていたものがあり、多くは基石として使用されていたと思われる。大半が径1.5～2.0cmの範囲に収まるものである。各地で認められるものの、1～2点しか出土していない例が多い。図示したのは欄干橋町遺跡第Ⅴ地点（150～166）、及び宮ヶ瀬遺跡群南（No2）遺跡（167～172）の一括資料で、いずれも土坑からの出土である。

土玉は、都内の遺跡で報告されているような球状を呈するものは確認できなかったが、池子遺跡群No1-C地点において、径約1.5cmで、2mm程度の小孔が穿たれ、側面が平坦に研磨された小玉が出土している。

年 代

遺構から出土した土製品のうち、共伴した陶磁器類から製作年代が推定される事例をみると、18世紀後半～19世紀代（中宿町遺跡第Ⅱ地点1号地下室、欄干橋町第Ⅴ地点13号土坑）、19世紀初頭頃（欄干橋町遺跡第Ⅳ地点108号遺構）、19世紀前半頃（欄干橋町第Ⅴ地点1号土坑）、19世紀第2～3四半期（中宿町遺跡第Ⅲ地点2・3・13号土坑）、19世紀後半（宮ヶ瀬遺跡群南（No2）遺跡）、近世後半～近代（川名No419第4・5地点遺跡1号竪穴状遺構）と、県内の事例はいずれも18世紀後半～19世紀代（明治時代を含む）であることが判る。

近世に属する土製品は、京都では17世紀前葉から認められ、都内の遺跡でも17世紀中葉頃に出現し、後葉には比較的多くの遺跡で出土することが知られている。県内で17世紀代の所産と考えられるものは、これまでのところ、東町遺跡の整地層より猿の土人形（12）が出土しているにすぎず、遺構から出土したものは報告されていない。県内では、土製品は貨幣経済の浸透と民間信仰の普及に伴って18世紀後半以降急激に増加したものと推測される。

5. まとめ

以上のように、神奈川県内から出土した土製品は約60遺跡（地点）、約200点を概観したが、その出土量は先にも触れたように、都内の1遺跡にも満たない量である。今後の調査により、出土資料の増加は期待できるものの、やはり江戸近郊の武蔵南部・相模地域では相対的に少ないということはいえるようである。

種別ごとの土製品の内容に関しては、都内の近世遺跡の出土資料と大きな差異は認められないものの、仔細にみると2・3特筆される点もある。すなわち、土人形においては、刻印から江戸在地系のみならず、京都系の製品が存することも明らかになり、相模地域での流通の一端を知る上で貴重な資料といえよう。

ままごと道具の中では、都内の近世遺跡でもあまり出土例のない鉢形の製品が下鶴間甲1号遺跡などで認められているが、それら資料は在地色の強い製品といえそうである。

箱庭道具については、きわめて出土例が少なく、県内での箱庭遊びは一般的でなく、都市型の遊・玩具といえるようである。

面打と芥子面の出土比率は、前者が少なく、後者が優勢であることが判明したが、それはかつて新湘南国道の報告で指摘されているとおりの結果となった。新湘南国道では、面打はモチーフに漢字や「いろは」が

記されていることから教育玩具の側面もあったとして武士・町人の子を、芥子面は民間信仰や年中行事に関連したモチーフが多いことから、農民の子を対象とした遊・玩具と考えている。一方、都内の遺跡では、石神裕之氏が述べたように、面打は旗本・御家人拝領地であった遺跡から、芥子面は町人地からの出土例がなく、関西系の遊びとして、その地域に関係した住民が多く居住していた遺跡から出土しているとしたものの、翌年の報告では、市川歴史博物館の研究成果を取り入れ（市川市歴史博物館1986）、面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と想定することも可能とされている。今回の土製品の概観を通じて、芥子面の方が面打より相対的に多いという結果が得られ、ここでも面打は都市的玩具、芥子面は地方村落の玩具と認めざるを得ないが、その背景として面打・芥子面がどのような遊びに、そしてどのような階層に使われたのかを明らかにするとともに、すでに新湘南国道で指摘されているように、それら製品の生産地から消費地・消費者への流通過程を解明することが必要となろう。

面摸は1点の出土例もないが、都内の近世遺跡の出土量からみても、今後、県内での出土はあまり期待できるものとはいえないようである。年代的にも18世紀代に遡る遊・玩具であり、当時、それらが地方に流通するものではなかったことを示唆しているようである。

これら土製品の年代が判明したものでは、一部17世紀代に遡るものも認められたが、県内では大半が18世紀後半～19世紀代の所産で、一部は明治時代前半に下るものまで存在することが明らかになった。

参考文献

- 安芸穂子 1991 「江戸遺跡にみる土人形—遺跡の性格と出土遺物—」『江戸在地系土器の研究』Ⅰ
 2000 「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』吉川弘文館
 2001 「Ⅵ 江戸の生活文化 5 遊び」『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
 石神裕之 1996 「出土泥面子の研究と課題」『諏訪町遺跡』文京区埋蔵文化財調査報告書第9集
 1997 「泥面子の地域性と編年への試論」『上富士前町遺跡第Ⅱ地点』文京区埋蔵文化財調査報告書第12集
 市川歴史博物館 1986 「泥面子分布調査」『市川歴史博物館昭和61年度年報』
 金刺伸吾 1973 「どろめんこの話」『どろめん』3
 新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡・放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書」
 市立市川歴史博物館 1983 「資料集・どろめんこ」
 首藤岩泉 1928 「江戸趣味 泥面譜（一）」『武蔵野』11-5
 東京都新宿区教育委員会 1988 「三栄町遺跡」
 東京都埋蔵文化財センター 2000 「汐留遺跡Ⅱ」東京都埋蔵文化財センター調査報告 第79集
 富永富士雄・大村浩司 1985 「新湘南国道埋蔵文化財報告書」新湘南国道埋蔵文化財調査会
 中野高久 1998 「刻印・寛書きからみる「玩具類」」『江戸在地系土器の研究』Ⅲ
 増子陽子 1978 「『どろめんこ』についての一考察」『日本考古学研究所集報』Ⅰ

参考史料

- 喜田川守貞（宇佐美英機校訂）1996『近世風俗志』岩波文庫
 喜多村信節 1979 「嬉遊笑覧」『日本随筆大成』別巻8 吉川弘文館